

第32期横浜市社会教育委員会議 第2回会議録	
日 時	平成31年3月22日（金）午前10時～正午
開催場所	関内駅前第一ビル 302号会議室
出席者	有元委員、石崎委員、大川委員、奥山委員、柿沼委員、菊池委員、小間物委員、七澤委員、牧野委員、室田委員
欠席者	なし
開催形態	公開（傍聴人4名）
議 題	<p>1 開会</p> <p>2 議事録の確認について</p> <p>3 議事</p> <p>（1）事例紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十日市場中学校 地域交流事業 NPO法人グリーンママ 理事長 松岡 美子 氏 ・ミニヨコハマシティ NPO法人ミニシティ・プラス 事務局長 岩室 晶子 氏 NPO法人ミニシティ・プラス 山本 功次郎 氏 <p>（2）事業案検討に向けたグループワーク</p> <p>4 その他・次回の開催予定</p>
決定事項	議事録確認者に奥山委員、柿沼委員に指名。 第3回社会教育委員会議の日程を平成31年7月2日（火）午前10時～正午に決定。
議 事	<p>(1) 事例紹介について</p> <p>資料に基づき、NPO法人グリーンママの理事長である松岡美子氏からご報告いただいた。</p> <p>() は事務局より補足で記載しております。</p> <p>■質疑応答等</p> <p>奥山委員：先ほど実行委員会形式での実施と言われたが、コーディネート役が必要ということで、事務局が行っていたというお話があったと思うが、最初はよこはまユース（以下「ユース」という。）さんの方で事務局をやっていたということで、今はどういう体制なのか。</p> <p>松岡氏：今はオブザーバーという（形で担っている）</p> <p>奥山委員：そうすると、事務局機能を担っているところというのは特になんかということか。</p> <p>松岡氏：うちが（担っている）</p> <p>奥山委員：そうですよね。だから実行委員会形式だけど事務局がいないと困るという。コーディネーター役を『いっぽ』がやっているということでしょうか。</p> <p>松岡氏：そうです。事務局機能が一番大変で、その大変な最初の3～4年の（時期を）ずっとユースさんがやってくれた。つまり、形を作ってくれた。それで、ある程度形ができるとあとは継続なので、それは継承すればいいということだったので、やっぱりそれをずっと一緒にそこがないと中々難しい。なので、はっきり言って中々地域は受け入れることはできるが、事務局まではやってくれないというのが正直なところ。そこをユースさんがやってくれて、うちは拠点ができただけなので、その拠点で管理をしたりとかも今やっているが、ある程度編集したものを継続してい</p>

くという形をとっている。事務局の最初の基礎はユースさんが頑張ってくれた。ユースの一員の山田さんという方がほんとに地域を隈なく歩いて、色んな人に声をかけてつないでくれた。それがあったからこそ、こういう事業をやりたいと言った時に下支えとか、ちょっとそのことを本にさらっと書いているが、最初の1～2年はそういったことをきちんとやったうえで、地域に出ていったというところがある。

石崎委員：十日市場中に専任として居り、平成18年、始まって2年目、実際に動くという場面の時にいた。話にも出ていたが、ユースさんが最初とっかかりをしてもらわないと、この事業はできなかつたなと思う。すごく丁寧だった。まず、場所を探してくれて、声をかけてくれて、それから子どもたちを集めるのは学校だが、集めた後、最初にオリエンテーションをしましょうということで、説明してくれる。色々な資料を基に説明してくれて、ボランティア希望の方（に対して）。それから、実際に現場に行ってみる。その後、まとめの会というのがあり、各団体に行った子どもたちがまとめの会というところで、また確認をする。そして次に繋げようというところ。大体そこで終わるのだが、ユースさんは一人一人に手紙を書いていた。そして「次も参加してください」という風にきれいなお手紙をもらった。そういう心配りというのが、まずとっかかりが始まるころだなと思った。やはり松岡さんが言われた通り、3年経つと、大体軌道に乗ってくるので、あとは『いっぽ』さん始め地域の方々が集まったり、よく飲んだりしながら進んでいって、無理しなくて今に至るという。みなさん努力はあったと思うが、いい時期に十日市場に就任させていただいたと思う。

室田委員：中学生の子どもたちがどんな風に関わっていたのかということについて、具体的に教えていただきたいところがある。たくさん団体があって、どういう風を選ぶのかとか、1年生から入ってずっと、例えば自分は途中からこっちに行きたいとか色々あるかもしれないが、そういうのはどうやって選ぶのか。あまり選べなかつたのかどうか。あるいは活動自体、入った団体で何か提案みたいなこと、例えば中学生の方から活動が少し変わるみたいなことが起こるのか。それとも、ある程度決まったことをやっているのか、団体によって違うと思うが、少し教えていただきたい。

松岡氏：一応この（資料に）夏ボラのパンフレットと書いてあるが、このパンフレットを必ず中学生に配っていて、開けると、各団体がいつどんな活動に来てほしいかということが書いてある。それを見て中学生は、自分で申し込みをする。それを先生方がまとめてくれる。これはあくまでも自発的なものなので、1年生、2年生、3年生バラバラに申し込まれて、その団体にはいっばいくる。少ないところもあるが、でもそれは子どもたちに行かす。それで学校の終業式の日オリエンテーションを開いて、私たちが中学校の体育館に、このオリエンテーションと書いてあるが、各団体が体育館で「私たちここにいますよー」とやって、それで中学生が団体のところに来て「いついつ行きます」とか確認をして「じゃあいらっしゃい」というのを学校側がオリエンテーションを必ずやり、それでもし来たかったら、各団体に自分で電話して連絡させます。その指導もしている。それで中学の休みなので、夏休み冬休み春休みやるのだが、冬休み春休みに関しては、直接団体に電話させます。（資料に）ボランティア掲示板と書いてあるが、職員室の前にこういうボランティア掲示板みたいなものがある。それにボランティアが貼ってあるので、

自分で中学生が、こういうボランティアに行きたいと思えば、その団体に直接行って、ということをやっている。

大川委員：大変興味深くお聞きした。室田先生の話と関係してだが、生徒さんたちの参加する原動力はどんなものがあるか？何らかの原動力があるからこそ、こういう風に広がっているのかなと感じている。社員さんもそうだが、参加して初めて楽しさが分かるということがある。中学生の時期にどのように行動の原動力が起きているのかを聞きたい。また、3年間しかない中で、例えば新しく入ってくる子どもたちに何か引き継がれるような仕組みがあるのかどうか聞きたい。

松岡氏：実は未だにユースさんに関わってもらっている。各夏休みの間の写真とかを撮って、それを中学校の昼休みとかに流して、全校生徒に見てもらおう。実はこういうことやっていますと。夏休みの夏ボラで、こういうことをやっているよ、ということを見せたい。これは学校にも協力してもらってのことだが、それを見たらうえで、またオリエンテーションとかがあるので、それに参加しなさい、というようなことで、それで申し込みを書く。(それで、活動は)実は楽しい。地域のお祭りのお手伝いだったり、うちの夏祭りのお手伝いなので、中学生にとってはボランティアだけど楽しい。地域の人にありがとうと言ってもらえる。そして森林(手入れ)も大変だったけれど、行って気持ちのいい場所で木を切る体験を試してみたりとか、昼食会も昼食を作ってみて、お年寄りの方からありがとうと言ってもらえる。つまり、楽しいということがあるので、そういうことを後輩に伝えていったりする。あとはクラブ単位で言うと、運動部全員で、剣道部かな、どんど焼きのときに竹刀を火で焼いたら、次の年の剣道部がすごく強くなったそう。なので、よしみんな行くぞ、といってどんど焼きのお手伝いをするという感じ。そういう地域が密接に繋がっているのが、十日市場の特徴なのかもしれない。楽しみなんですよ、生徒たちが。やらされている感ではないということと、授業の一環で行くとかではないので、本当に休みの自分の時間を使って行くということ。無理するなと私たちも言っている。そこが子どもたちにも伝わっているかもしれない。

資料に基づき、NPO法人ミニシティ・プラスの事務局長、岩室晶子氏及びNPO法人ミニシティ・プラスの山本功次郎氏からご報告いただいた。

■質疑応答等

室田委員：本当に楽しい活動で、話はちらちらと聞いていたが、知らないことだったので、ありがとうございます。質問は、子どもが色々やっていることを実際に実現させたりとかは、大人がやっているのか。大人の関わり方というのは、子どもに対する口出し禁止ということだが、場は大人の方で設定をしたりするわけですよ。あるいは色んな人を紹介してみたりとかを大人がしているわけですよ。その辺の関わりがどこまでが子どもで、どこまでが大人がサポートするのか。結構これは大人が全力サポートだなという気がしている。大人が子どものやりたいことを全力でサポートして、そして実現と一緒にして子どもの夢を叶えるみたいなそういうイメージがある。その辺のイメージが合っているかどうか教えていただければ。

岩室氏：例えば、子どもがお店屋さんをやりたいと言えば、材料があればできます、という話で簡単にいくが、例えば、ある子どもが「声優をやりたい」と言ったら、簡単にはできそうにないと大人はおもうかもしれない。でもその子が声優のどこに魅力を感じているのかということヒアリングしていくと、人前で喋りたいということがわかってくる。そうになると、当日イベントでの放送局をやるのはどうかなと話す。子どもが「ああ、それでいい」となっていくたりする。他にも、子どもが絵描きをやりたいと言った時に、大人がどうやってやるのか、何がやりたいのかということの細かく聞いていくと、似顔絵描きをやることになったり。やってみると全然お客さんが来ないので、途中から自分なりに絵を描いた葉を作って売ったりとかし出した。他にもいじめのない街にしたいとか漠然と話している子に対してもじっくり聞いていくと、じゃあ街の中でアンケート調査してどういうことができるかということについて聞くことにしようとか。そういう意味でのサポートはするが、最後にどうやるかというのは自分で決めるという風になっている。

奥山委員：こちらの資料のチラシで集客という形なのかなと思ったが、学校との連携で具体的にこんな風に進めているみたいなことはあるのか。近い学校が参加しやすいのかとか、結構この学校は常連で来ているとか、学校との連携でポイントになるようなことがあれば教えていただければ。

岩室氏：一応これ（ミニヨコハマシティ in 港北みなも）は校長会を通して小学校には全児童に配布していただいている。一番最初は（子ども）青少年局との事業だったというのも大きく、そのまま（現在も）お願いできている。あと、もう一つ、当団体が出しているつづきジュニアタイムズという新聞の方にもミニヨコの開催をお知らせしたり、運営市民も募集したり。これは小中学校全部、都筑区内で配布をしている。それを見て、運営の方をやりたいという子が来ている。

集客に関しては、多くの応募がある。今回は事前申し込みを受けたが、今までやっていなくて、子どもが700人くらい来る。保護者も来ると、1,000人を超えてしまう。

(2) 事業案検討に向けたグループワークについて

2班に別れ、事例紹介を通して感じたこと、子どもの可能性について、グループワークを行った。

■グループワーク終了後、各班発表

有元副議長：こちらのグループから報告します。色々出たが、自由に定まってないからこそ可能性がある存在。それが子ども。体を使って仲間とともに遊びを通じて社会性を育てているというのが我々の考えた理想の子どもという存在である。そこから、それを支援する、支える大人に必要なことが、まず子どもを理解する。柔軟に受け止めて決めつけない。良かれと思って決めつけたらだめということ。あと、子どもが主体的に場を選べる、参加する場を選べるのが大事だろうなというふうになんかの実践を聞いて思った。あとは、頭だけでなく体も使う活動、作業、体験、これも大事だなと。失敗もあり、こうやってみんなで学んでいくのがいいだろうという結論になった。

大川委員：スロースタートで最初のチームのようにはうまくいかなかったが、これ

も最終的な大人がこう対応しなくてはいけないということに繋がってくるが、何か「良いリーダー像」になってしまった。いい子を描き過ぎてしまって、情熱を持って自由と可能性を自分も期待しているし、周りもそういう環境にあるし、それで巻き込みができる、団結力がある、一体感ができる子がいい子という風になってしまった。(ただし) 悶々とこちはし出して、もっと多様性を考えたらリーダーでなければいけないことはないだろうというところから、最終的にはこれももしかしたら大人の考え方なのかもしれないが、最初、子どもの像というのが、地域社会に必要な存在としていたが、話し合っていたらそうではなくて、「地域社会に必要な存在とされていることを感じている存在ではないか」という意見を出した。要するにここは大人が目線だった。我々にとって、あるいは地域社会にとって必要な存在というところから、自分たちが地域や社会に必要な存在とされていることを感じられる存在というところにたどり着きまして、最終的には見守る力が不足している、あるいは子供たちに対して「伝える」ことと「伝わる」ことが違うということを理解していないといった問題があると感じた。子どもに対してもそうなのだが大人に対してもそういうことでトラブルとかもある。言った言わないとか何回言えばわかるんだとか。そういうのではなくて、それは伝わっていないんだと、だから伝えられてないというのがいけないんじゃないかということが理解できていないと、言葉だけじゃないですし、相手に対する期待とか、伝え方とか。今日もあったように、動画で子どもたちが楽しんでいる様子を見せていると言っていたが、そういったところであったりとか。あとは多様な体験ができる場。色々な人たちと会話できる場。自分を気づける場を作ってあげるとか、そういったところが出てきた。雑駁で申し訳ないが以上です。

牧野議長： どうもありがとうございました。時間も押してきているので、この辺りにさせていただければと思う。今やっていただいたのは、KJ 法もどきみたいなのをやっていただいた。みなさんに良いところを出していただくというものが、どちらかというと、理想の子どもを出すということになってくる。これは言い方を変えると、私たちもそうかもしれないが、(子どもたちに) あまり触れてないのかもしれない。ただイメージを持っていて、こういう子どもたちがいいんじゃないかということが出てくる。さらにそこからいくと社会全体にそういう子どもたちが多様にいるということになると思う。それを一回一つの子どもに作り上げてみたらこんなイメージになるのではないか。そしてそのような子どもたちと一緒にやっていくには、自分たちはどうしたらいいかということを経験してもらった。ある意味では押し付けないとか認めていくとか受け入れるとか、逆にそれは大人たちも受け入れてもらわないといけないし、子どもたちも大人たちを決めつけなくてももらわないといけない、というところもある。

そのような中で、よく私たちが言うのは、子どもたちは未来に対する価値なんだと議論することがよくある。今既に社会の主役としているんだという位置づけにしていくと、子どもたちの社会参加の在り方って、どうあったらいいのか、いわゆる、保護したり指導したりでなく一緒にやっていくパートナーになってもいいのではないかということもあると思う。今後そのあたりを社会参加の在り方の議論になると、続いていくといいなというふうに思った。ありがとうございました。

また、先ほどご紹介いただいた二つの事例だが、国も中教審などで、学校の改革も含めてだが、地域学校協働活動という言い方をしている、地

	<p>域が子どもを受け入れる、地域が学校に参加して学校の中で色んな教育活動を展開するというだけでなく、どちらかという子どもが地域に出てきて、地域の方と一緒に活動していきながら様々な社会体験を積んで、自分も社会の主役であるし、それであれば、自分の人生を作ることができるんだということ覚えてもらわないと、大変なことになるのではないかという議論が続いている。その中で、中教審で議論になった時に、例えば、都心部は地域が壊れてしまっているのに、中々そういう議論はうまくいかないのではという話もあったが、逆に都心部は色々な可能性があって、色々な団体の方が動いていらっしゃるって、地縁関係ではないかもしれないが、それぞれに子どもたちが活躍する場所があるんだということが今日よく分かった。それだけでも収穫があったなと思うが。各地で子どもたちを学校から引き出しながら地域の大人たちと一緒に活動をしていくということと、学校での知的な教育というのを結びつけていながら、子どもたち自身が自分で人生の主役になっていくという社会参加の在り方、社会を作っていく在り方というのをこれから少し、ここでも議論できればいいなと思ったので、今後ぜひともご協力いただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。</p>
資 料	<p>【配布資料】 ■ 事例紹介資料</p> <p style="text-align: right;">資料 1</p>